

中国語における“把个”構文の意味について

A Study of the Meanings in *Ba ge* Construction in Chinese

小路口 ゆみ
KOJIGUCHI Yumi

提要 “把”字句中有一种特殊的句型“把个”句型，就是句子结构为：“名词+把+个+名词+动词+其他”的句型。本文通过对清末和现代的一些文献中的“把”字句的“个”在这个句型中所起的作用进行考察和分析，发现这个“个”并不只是表示“任意”的名量词，还有一部分是表示回数的动量词。从而进一步探讨“把个”句型的意义，对学习汉语的外国人来说，不仅可以更好的理解这个“把”字句的意义，还能更好地使用“把”字句。

キーワード：“把个”構文 量詞 “个” 意味 動態

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. “把个”構文における“个”について
4. “把个”構文の意味について
5. おわりに

1. はじめに

“把个”構文は一種の特別な“把”構文であり、例えば、例（1）の“小张把个孩子生在火车上了。”のような文である。この種類の“把”構文の構造は「名詞1 + “把” + “个” + 名詞2 + 動詞 + その他」である。本稿ではこの種類の“把”構文を“把个”構文と名付けた。その構文構造は、「名詞1 + “把” + “个” + 名詞2 + 動詞 + その他」である（「名詞1 + “把” + “一个” + 名詞2 + 動詞 + その他」構文を除く）。

（1）小张把个孩子生在火车上了。（王还 1985）

（1）’ 小张把孩子生在火车上了。（作例）

（2）杨杰看他缸里水干了，挑起水桶，不大一会儿，给老汉挑了两担水，把个老汉感动得

簡直不知说什么好了。(杉村博文 1999 : 350)

(2)' 杨杰看他缸里水干了, 挑起水桶, 不大一会儿, 给老汉挑了两担水, 把老汉感动得簡直不知说什么好了。(作例)

例(1)の“小张把个孩子生在火车上了。”の意味は決してわざわざ“孩子”を“生在火车上”ということをしたわけではない。この中の“个”は“一个”の“个”ではなく、その“孩子”も任意の“孩子”ではなく、張さんが産んだ子供である。例(1)“小张把个孩子生在火车上了。”によって、話者は“小张”を責めて、その事実に対して意外な反応を表している。

“个”がないと、ただ単に“小张把孩子生在火车上了。”という事実だけを表している文となる。例(2)も同様である。本稿では《儿女英雄传》(111例)、《红楼梦》(27例)、《儒林外史》(12例)、《老残游记》(1例)、《骆驼祥子》(2例)、《人到老年》(1例)等の言語資料の“把个”構文(合計153例)を調査・分析する。

2. 先行研究

“把个”構文について、各文法学者がそれぞれの説を唱えているが、代表的文法学者は朱德熙(1982)、杉村博文(1999 : 347~362, 2002 : 18~27, 2006 : 17~23)、土井和代(2000 : 27~45)、陶红印・张伯江(2000 : 433~450)、張誼生(2005 : 14~19)がある。

2.1 朱德熙(1982)

朱德熙(1982)では、“偏偏把个老王病倒了”の文の中の“老王”が定的な対象にも関わらず、その前に不定数量詞の“一个[ひとつ]”が用いられているのは明らかに矛盾である。この現象については、次のような解釈が可能であろう。即ち、“老王”は確かに特定された人物である；しかし、話し手はもとより、病気になる人が“老王”であるとは思ってもよらない；にも関わらず、それはほかの誰でもなく“老王”その人であった(“偏偏”[よりによって]という語が何よりもこの間の意味合いを伝えている)；その意味において“老王”は話し手にとっては既知の対象ではない；そこで“一个”が添えられることになる(杉村、木村訳による)

しかし、筆者の考えでは、どの状況の“老王”でも“老王”であり、同一の人物である。既知の情報であり、特定である。

2.2 杉村博文(1999 : 347~362)

杉村博文(1999 : 347~362)は、“把个N”を“把一个N”と区別し、また“把个N”の量詞を“个”に限ったうえに、この“个”を社会通念的属性や現況の活性化を意図した「不定化」の“个”だと位置づけ、「Nに対する思い入れ」「事態の展開に対する驚き」という意味を表すと主張している。

また、同氏(2002 : 18~27)¹⁾によると、“把”構文における“把”の目的語が固有名詞や定名詞句の時“个”を伴う現象が見られる(把个NV)が、この場合には“出乎意料”の

気持ちを含意する。話し手が N に対して本来持っていたイメージや社会的な常識から外れた行動を取ったときに生まれる N と V の間のねじれ現象（“扭曲関係”）から生じる含意であり、N に対するこのようなイメージや社会通念を“情理値”と呼んでいる。

2.3 土井和代（2000：27～45）

土井和代（2000：27～45）²⁾は杉村（1999：347～362）の説に対して、異を唱えている。土井和代（2000：27～45）は、“把个”構文の“个”は「Nの属性からその存在を具体的に表示する機能」という機能であり、いわゆる、「属性表示機能」であると主張しているが、Nの種類別に用例を通じて検証している。

2.4 陶红印・张伯江（2000：433～450）

陶红印・张伯江（2000：433～450）³⁾によれば、“把个+不及物动词”構文の“个”は特定か類化かになる。“把个”構文の意味は外来のことににより、人物の心理情緒の変化を表すと主張している。

(3) 既然已经把个孤儿抱回了金府，那无论如何也不能再扔出去。（陶张：448）

この“个”は“这个孤儿”（“专化”）も指すし、“这样的孤儿”（“类化”）も指すと主張している。

2.5 張誼生（2005：14～19）

張誼生（2005：14～19）⁴⁾によれば、意味を表す特徴から見ると、“个”の役割は把字の賓語を不定化、実体化、類別化、確定化であり、“把个”構文は“超常性”、“兼容性”、“倾向性”、“承接性”という特徴がある。

以上の先行研究では、“把个”構文の“个”は名量詞として研究されているが、動量詞として使われる“个”も多数存在している。しかも、“把个”構文の意味についても「ねじれ現象」という解釈が主流となっているが、筆者は“把个”構文の意味には多義性があると考えている。本稿では、“把个”構文の“个”の役割及び“把个”構文の意味について考察・分析する。

3. “把个”構文における“个”について

3.1 量詞“个”について

“把个”構文の意味を研究するために、“把个”構文と“把”構文を区別する必要がある。その区別には、文の中の“个”の役割が重要な要素である。本節では、量詞“个”及び“把个”構文の“个”について、考察を行う。

3.1.1 “个”の先行研究

3.1.1.1 輿水優（1985：130）

輿水優（1985：130）は、以下のように述べている。

「名量詞の中で、形態単位としてもっと広範囲に使われるのは“个”である。その他に、動賓連語の賓語の前において動作量をもあわせてあらわすはたらきをすることがある。

(4) 我打个电话告诉他吧。ひとつ電話をしてかれにお知らせよう。(輿水 1985:P130)
(中略)

この用法は動賓連語の熟語として固定しているものに多く見られ、それを二つならべて、「(ちょっと) ~したり、~したり」といった表現をつくることが少なくない。また時には“跟他见了个面”(彼と一度顔を合わせた)と、明確に数量(回数)を示すことがあるものの、殆どは「ちょっと;すこし」と不定の、軽いひびきをもった動作量表現となる。

3.1.1.2 杉村博文 (2006: 18)

杉村博文 (2006: 18)⁵⁾ は、個体量詞の意味機能はすべての個体量詞が不定を表す。たとえば、

(5) 到了饭店，一看，门前修得不错，张灯结彩，蛮是气派，这是一座二层小楼，包间雅间齐全。(杉村博文 2006: 18)

“个”はもう一つの意味機能がある。ある事物百科事典のように知識の属性に属しないことを活性化する——文化属性と名づけられている。この機能は他の量詞がない機能である。

3.1.1.3 《现代汉语八百词》增订本 (2010: 222)

《现代汉语八百词》增订本 (2010) によれば、“个”の一つの用法は以下の通りである。“动+个+宾。常常连用两个，有时还在后面‘的’或‘什么的’。整个句子显得轻松，随便。例：他就爱画个画儿，写个字什么的。/有个差错怎么办？”(「動+个+賓」という形で、“个”はよく二つを連用し、時には後ろに‘的’か‘什么的’が使われて、その文は軽く感じる。筆者訳)。

3.1.1.4 《现代汉语词典》第7版 (2007: 442)

《现代汉语词典》第7版 (2007) は、“用于带宾语的动词后面，有表示动量的作用(原来不能用“个”的地方也用“个”)：“见个面儿”，“说个话儿”。(賓語がある動詞の前に置き、動量を表す役割を持つ。もともと“个”を置けない場所でも“个”が使える。筆者訳)と書いてある。

3.1.2 “说个话儿”と“说话儿”の異同について

以上の先行研究によると、“个”には二つ機能があり、一つは、名量詞である。“个”は“个”の後の名詞の数を表している。そのほかに、動量詞である。この“个”は動詞の回数を表している。

3.1.2.1 名量詞の“个”

“个”はヒトとモノを数えるときの助数詞であるが、その文法的な意味は数量のみではなく、例えば、

(6) “好，不要丢石头了。我们还是到对面去找个地方坐坐，”《家》第14章

(7) “我承认自己是个懦夫。我不敢面对生活，我没有勇气。我只好让自己变得糊涂点，可以在遗忘中过日子。”《家》第14章

例(6)の“找个地方坐坐”の“个”は“一个”とも言えるが、この“个”は名量詞の“个”である。この例(7)の“我承认自己是个懦夫。”は“我承认自己是一个懦夫。”に言い換えられない。前者は“我”が“懦夫”のような人で、後者は“我”が本当に“懦夫”であるという意味を表している。この“个”によって、本当の“懦夫”から“懦夫”のような人になっている。

3.1.2.2 動量詞の“个”

“个”は動量詞の場合、動作の時間や回数が少量であることを表す。

(8) 今天跟人说个话，居然脸红了，毕竟我脸薄，好久没有跟不认识的人说话了。(weibo.cn)

(8)' 今天跟人说话，居然脸红了，…(作例)

例(8)の“今天跟人说个话”は“今天跟人说一个话”に言い換えられないので、この“个”決して“话”の名量詞ではなく、“说”の動量詞である。「人とちょっと話す」というような意味である。行う動作が少量であるという気持ちである。ちょっと話ただけで、顔が赤くなったという描写であり、ちょっとした会話というとるに足りない行動と対照させるために、顔が赤くなったという反応に文の意味の重点を置いている。例(8)'は例(8)を持つ少量の意味がなく、ただ事実を述べただけである。よって、“个”は動量詞の場合、動作の時間や回数が少量であることを表す。この時間や回数が少量であるということから、「ちょっと〜する」というように、語気を和らげるために用いられる。行う動作が少量であるということは、主語がその動作に対して気軽に取り組めるという意図が働き、動作主の動作に対する気軽な・気楽な態度を表すために用いられる。

3.2 “把个”構文における“个”について

筆者は“把个”構文の“个”は名量詞でもあるし、動量詞でもあると考える。“把个”構文は、「名詞1 + “把” + “个” + 名詞2 + 動詞 + その他」であるが、名量詞の場合、“个”は“把”の目的語である「名詞2」の「不定」の“一个”を表していたり、特定の“这个”“那个”を表していたりする。動量詞の場合、この“个”は“把”の回数を表している。「ちょっと」、「少し」という意味である。

(9) 宝玉道：“不相干，是明瓦的，不怕雨。”黛玉听说，回手向书架上把个玻璃绣球灯拿了下來，命点一支小蜡来，递与宝玉，道：“这个又比那个亮，正是雨里点的。”

(《紅》45回)

例(9)にある“回手向书架上把个玻璃绣球灯拿了下来,”の中の“个”は“一个”であり、この“玻璃绣球灯”は任意ではなく、“黛玉”がとってきた“玻璃绣球灯”である。この“个”はたったひとつの“玻璃绣球灯”の数量を表していて、“一个”あるいは“那个”である。よって、名量詞である。

[図1] 名量詞の“个”

回手向书架上把个玻璃绣球灯拿了下来…

「名詞1 + “把” + “个” + 名詞2 + 動詞 + その他」



名量詞

しかし、

(10) 公子答应着站起来，又回舅太太道：“我父亲、母亲吩咐我，叫给舅母行礼，请舅母到厢房里头坐下受头。”把个舅太太乐得笑逐颜开，说道：“还给我磕头呢，很好！你就这里给我磕罢，我没这些讲究。”公子转过身来，便在舅太太跟前磕下头去。(《紅》45回)

例(10)の“把个舅太太乐得笑逐颜开”の“个”は“一个”ではなく、“这个”でもなく、前例の“说个话儿”と同じく、動量詞である。「ちょっと“舅太太”に喜んでもらって」というような気楽な気持ちを表している。

[図2] 動量詞“个”

把个舅太太乐得笑逐颜开

「名詞1 + “把” + “个” + 名詞2 + 動詞 + その他」



動量詞

“把”構文の中の“把”は動詞から変遷してきて、前置詞になったものである。よって、清末のとき、動詞の属性はまだ存在している。よって、この中の“个”は動量詞である。

4. “把个”構文の意味について

以上先行研究をまとめると、“把个”構文の意味は「意外性」であり、「ねじれ関係」であるが、本節では《儒林外史》、《红楼梦》、《儿女英雄传》、《老残游记》、《骆驼祥子》、《人到老年》の153例の実例をみて、分析する。

4.1 “把个”構文の意味

4.1.1 意外性について

“把个”構文によって、「意外性」を表す。

- (11) 了半日，渐渐喘息过来，眼睛明亮，不疯了。众人扶起，借庙门口一个外科郎中姚驼子的板凳上坐著，胡屠户站在一边，不觉那手隐隐的疼了起来。自己看时，把个巴掌仰著，再也弯不过来；自己心里懊恼道：“果然天上文曲星是打不得的，而今菩萨计较起来了！”想一想，更疼得狠了，连忙问郎中讨了个膏药贴著。（儒林外史第三回）
- (12) 宝玉道：“你还不知道我的心和他的心么？都为的是林姑娘。你说我并不是负心，我如今叫你们弄成了一个负心的人了！”说着这话，他瞧瞧里间屋子，用手指着说：“他是我本不愿意的，都是老太太他们捉弄的。好端端把个林姑娘弄死了。”

例(11)の“把个巴掌仰著，”の中の“个”は“一个”であり、この“巴掌”も“胡屠户”の“巴掌”である。この“一个”は数量のみを表している。胡屠户は、自分の手が怪我していたことが分からなくて、確認すると怪我していたことがわかり、そのことにびっくりしたという表現である。例(11)の“个”は名量詞であるが、意外性を表している。例(12)の中の“个”は動量を表す動量詞である。“把”の後に“个”により、“林姑娘”がなくなる可能性がないのに、亡くなったということにびっくりした表現である。“林姑娘”が“死了”という事にたいして、とても残念な気持ちを表している。

4.1.2 「ねじれ関係」について

“把个”構文により、「ねじれ関係」を表す。

- (13) 有时候欣喜，有时候着急，有时候烦闷，有时候为欣喜而又要惭愧，有时候为着急而又要自慰，有时候为烦闷而又要欣喜，感情在他心中绕着圆圈，把个最简单的人闹得不知道了东西南北。（《骆驼祥子》19）
- (14) 药里用了犀角、黄连，几日不能灌浆；把赵氏急得到处求神许愿，都是无益。到七日上，把个白白胖胖的孩子跑掉了。赵氏此番的哭泣，不但比不得哭大娘，并且比不得哭二爷，直哭得眼泪都哭不出来。整整的哭了三日三夜。（《儒林外史》第6回）

例(13)の“把”の目的語は“最简单的人”であるが、その動詞及び結果は“不知道了东西南北”となっている。その“最简单的人”が“不知道了东西南北”という状態になっている。これはいわば「ねじれ関係」であるといえる。同様に、例(14)の“把”の目的語は“白白胖胖的孩子”であるが、その動詞及び結果は“跑掉”となっている。この“白白胖胖的孩子”はかわいい子供という意味で、この“跑掉”はなくなったという意味である。可愛い子供は普通健康に成長していくことになるが、ここではなくなったということになっていて、これも「ねじれ関係」になっている。

4.1.3 一般的な因果関係について

“把个”構文により、一般的な因果関係を表す。

(15) 得到妻子的鼓励，司马志清更是小心翼翼，力求功德圆满。从妻子嘴里打探到两位老同学的嗜好，下午他又跑了一趟王府井，为曾惠心买了今年的新茶，为沈兰妮买了最贵的瓜子儿。回到家来，他又脱掉外衣，亲自拖地板、擦桌椅，把个小过厅收拾得干干净净。（《人到中年》）

(16) 贾母道：“他外头好，里头弱。又搭着他老子逼着他念书，生生的把个孩子逼出病来了。”（《红》29回）

例（15）の“司马志清”は“力求功德圆满”のため、“小过厅”を掃除した。掃除をすれば、一般的には綺麗になるわけなので、これは一般的な因果関係であるといえる。この“个”は“这个”か“那个”の意味であるが、それを加えることによって、叙述文にある種の生き生きとしたニュアンスを附加している。例（16）の“把”の目的語である“孩子”は“他外头好，里头弱”という特徴があつて、“他老子逼着他念书”の条件があつて、その因果関係で“逼出病来了”という蓋然的な結果になった。この文は、文中“个”によって、“贾母”のとても残念な気持ちが表れている。

以上の分析によると、“把个”構文の“个”は、「意外性」、「ねじれ関係」を表すだけでなく、一般的な因果関係も表すこともできる。ただ、“把个”構文が一般的な“把”構文と違うのは、ちょっとした、気軽なニュアンスおよび生き生きとしたニュアンスを帯びている。

4.2 “把个”構文における動詞

上記の文献の153例の“把个”構文における動詞について、分析・考察する。

4.2.1 及物動詞

4.2.1.1 処置義動詞

收拾、闹、拖、撮、脱、逼、烘染、问、拿、裹、拈、摆、送、揉搓、落、打、耍、弄、嫁、仰、晃荡、放、宠、丢、养活、铺、塑、扔、钓、按、作成、抹、寄放、倒、揭、低、伸、贴、革、穿插、联、绷、拉、搦、说、掳、救护、擎、望、腆、拴、拐、踹、断送、递、撮、看、搁、扎、应酬、堵、接、登、养、脱落。65個ある。

4.2.1.2 心理活動動詞

气、心疼、唬、臊、急、欢喜、慌、恹、吓、羞、喜欢、乐、伤。13個ある

4.2.2 不及物動詞

没、哭、跑、走、死、疼。6個ある

4.2.3 形容詞

坏、忙。2個ある。

以上動詞の調査により、“把个”構文における動詞は心理活動動詞・不及物動詞のみではなく、処置義がある及物動詞も多く存在しているということが明らかになった。一般的な“把”構文と同じく動詞を用いることも明らかになった。よって、“把个”構文は“把”構文と同じ意

味を持っているが、ただ“把”構文よりも気楽なニュアンスを帯びているのに過ぎない。

5. おわりに

本稿では“把个”構文について、考察・分析した。“把个”構文の中の“个”は名詞にかかっている名量詞だけではなく、“把”にかかっている動量詞も多数存在している。名量詞の場合、“个”の前に“一”も置くことができるが、動量詞の場合はできない。その“个”は数量、指定を表す名量詞でもあり、少しの意味と気楽な気持ちを表す動量詞でもある。また“把个”構文の意味・動詞からみても、“把个”構文は「意外性」(例 11, 12)、「ねじれ関係」(例 13, 14)を表すことができるが、一般的な“把”構文と同じく結果を表すこともできる(例 15, 16)。ただ一般的な“把”構文と違うのは、ちょっとした、気楽なニュアンスおよび生き生きとしたニュアンスがあることである。

注

- 1) 杉村博文 (2002 : 18~27) は、「“把个NV”这个格式表达事态的发展出乎说话人的意料之外，而意料得自说话人对N的认识。“出乎意料”这一语义特征在形式上表现为无定成分出现在“把”宾语的位置，在意义上表现为N和V之间的扭曲关系。说话人对N的量词特征——最重要的外观特征——和数量都不感兴趣，只对N的情理值感兴趣，在这样一种语义表达过程中，量词“个”所起的作用就在于通过“类化”激活N的情理值。量词的泛化（亦即“个”化）以及数词“个”的消失都是这种心理活动所带来的句法后果。」と述べている。
- 2) 土井和代 (2000 : 32) は、「この両者（“一个N”と“个N”）をはっきり区別したうえで、“个N”の“个”を、Nを属性から具体的な存在であることを表示するもの——「Nの属性表示機能」を有するものと捉える。“个”をそのように捉えれば、“把”構文の目的語は話しても聞き手も特定指示できるものという文法規則に反しないばかりでなく、すでに特定できる目的語に“个”を附加して、属性からその存在を示すという特殊な用法であるために、この“把个N…”がそう多用されることのない説明にもなるからである。」と述べている。
- 3) 陶红印・张伯江 (2000 : 433~450) によれば、「总起来看，我们认为个的主要作用是专化和类化，不在于指示名词信息的性质。（中略）“把个+不及物动词”在近代汉语晚期为一常见格式，其功用是描写外在事物导致人物心理情绪的变化，现代汉语中“把个+不及物动词”的格式基本不存在。」と述べている。
- 4) 張誼生 (2005 : 14~19) によれば、「从表义特点看，“个”的功用是使得把字宾语无定化、实体化、类别化、专指化；而把个句式在表达上的特点则是效果超常性、施受兼容性。主观倾向性和语篇承接性。」
- 5) 杉村博文 (2006 : 18) は、“个”について、以下のように述べている。「“个”的语义功能在于表示其后名词的无定性，可以加数词“一”说成“一个”。（中略）而“个”的另一个语义功能——

用来激活一个事物不属于百科全书式知识的属性（本文姑且称之为文化属性）——则是其他量词所不具备的。」

言語資料：

《儒林外史》、《红楼梦》、《儿女英雄传》、《老残游记》、《骆驼祥子》、《人到老年》

参考文献

日本語

大河内康德 1985 「量詞の個体化機能」『中国語学』No.232

奥田寛 1982 「说“一个”」『中国語学』No.229

興水優 1985 『中国語の語法の話—中国語文法概論』 光生館

杉村博文 1999 「“把个老汉感动得…”」『現代中国語研究論集』347-362頁 中国書店

藤田益子 2010 「“把”構文における賓語の性質と量詞の機能について——『儿女英雄伝』を中心とした“把+個+N+VP”構文の認知に関する考察——」『新潟大学国際センター紀要』第6号 18-73頁

安井二美子 1997 「“把”構文における目的語について」『中国語学』No.244:1-13頁

————— 2003 「“是（一）个N”の認知言語学的アプローチ」『中国語学』No.250:151-170頁

中国語

杉村博文 2002 <论现代汉语“把”字句“把”的宾语带量词“个”> 《世界汉语教学》第一期 18-27頁

————— 2006 <量词“个”的文化属性激活功能和语义的动态理解> 《世界汉语教学》17-23頁

王还 1985 <“把”字句中把的宾语>《中国语文》第1期 48-51頁

王还 1987 <“把”字句和“被”字句>《汉语知识讲话》（合订本）上海教育出版社，1-37頁原载于1959 <“把”字句和“被”字句>《汉语知识讲话》上海教育出版社

薛凤生 1987 试论“把”字句的语义特性 《语言教学与研究》1987第1期 4-22頁

付記

ここで本稿に関してアドバイスをくださった『東アジア国際言語研究』の査読の先生お三人の方に感謝申し上げたいと存じます。貴重な助言をしていただき、大変勉強になりました。この場を借りて、感謝申し上げます。本稿の不備、誤りなどはすべて筆者の責任です。